JIJI PRESS 時事通信社
コメントライナー
第8659号　　2026年10月7日（水）

経験が通用しない「車両水没豪雨」

防災システム研究所　所長　山村　武彦

◆１０分で車が浮いた

今夏、西日本は少雨と災害級猛暑に悩まされたが、東日本では前線や台風などにより、各地で車両を水没させる記録的豪雨が頻発した。

特に8月の千葉豪雨では、死者・行方不明１４人、住家被害６２２０棟、浸水などによる車両保険の支払い件数が1万9千件（8月28日現在）を超える甚大被害となった。

犠牲者の発見状況は、水没車両内3人、冠水道路上５人、農道１人、用水路１人、川沿い１人、田んぼ１人、発電機排気ガス中毒死１人、不明１人。そのうち冠水道路などで発見された人も、浸水・水没危険車両からの避難途上に遭難したとみられ、大半が道路冠水・車両浸水起因と推定されている。

浸水車両から脱出して助かった千葉市の男性は「大雨だったので、いつものように前の車のテールランプを頼りに走行していたら、アンダーパスに入ってしまった。エンジンが動いているので大丈夫と思っていたが、１０分ほどで動かなくなり車体が浮き、水が入ってきた。なんとかドアを開け、ギリギリ脱出できたが死ぬと思った」と話している。

◆冠水道路の錯覚

千葉県柏市では水没した軽乗用車から70代の夫婦が救助されたが、妻は搬送先の病院で死亡が確認された。救助に当たった男性は「消防に通報したが、すぐには行けないと言われ、頭が浸かるほどの深さの水をかき分け、近くにいた人から受け取った鉄パイプで窓を割って、運転席の男性を助け出し、その後女性を引き上げた」という。

その現場に行ってみた。そこは閑静な住宅街の道路。坂が集まる交差点付近の窪地で、内水ハザードマップでは3～5メートルの浸水想定区域に指定されていた。

救助した男性が撮影した画像を見ると、窪地は水で満たされ、平坦道路が続いているような錯覚に陥る。湛水前の地形や危険度を知らなければ、警戒せず走行するのも無理はないと思った。

◆フェイルセーフ

経験や常識が通用しない豪雨には、異常事態でも自動的に安全側にシフトするフェイルセーフ対応が求められる。千葉豪雨を踏まえ、国交省は一定の大雨予測や危険警報で通行禁止のバルーンを膨らませるなど、自動又は遠隔操作で遮断機を起動し、アンダーパスの予防的通行規制を9月７日から開始。

一方、自動遮断機が未設置だった千葉県管理のアンダーパスは、リモート監視で冠水の危険が高まると、担当者がバリケードなどで通行規制作業を行ってきたが、駆け付けた時にはすでに冠水していることもあったという。９月１６日、全アンダーパスの自動遮断機整備費として、千葉県は補正予算案に3億6千万円を計上した。

宮城県多賀城市では、大雨・浸水が予測される場合、３０年前から高台の駐車場を無料開放してきた。大雨になった9月６日には約４００台が車両避難所を利用したという。他の自治体もこうした事例を参考にしてほしい。

当然、自助努力も重要だ。平時から国交省の道路防災WEBマップにある事前通行規制区間や冠水想定箇所を避けて通行するとか、線状降水帯予測や危険警報が発表されたら、外出は控え車を使わないなど、猛烈豪雨の頻発を新常識とした日常が求められている。　（やまむら・たけひこ）

◆監修◆ 内外情勢調査会　　◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座 5-15-8　ＴＥＬ：03-6800-1111（代表）
この記事に関する問い合わせは、**時事総研（03-3546-2384）**まで
本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003